

大分が誇る海岸線

人

海上輸送と
RORO船

産業

物

海

ロケーション

海が一望できる

道

観



OITA COASTLINE

7月16日は海の日。今回は、大分市の海岸線にスポットを当て、人や貨物を運ぶ船や港の役割、景観を楽しめる海辺のサイクリングロードの魅力を紹介します。



大分地区のコンテナターミナルは、物流の拠点として重要な役割を果たしている。

平成6年には輸入促進地域（FAZ）に指定され、平成8年、その中心となる大分コンテナターミナルに水深14m岸壁、ガントリークレーンが整備、供用開始されました。

一方、港の整備とともに背後の

れを契機として急速に阪神地域との海上交通が盛んになり、鉄道網の整備と相まって東九州における海、陸の接点として重要な地位を占めるに至りました。

戦後は、日本経済の拡大に対応するため、昭和34年以降、石油配分基地（西大分地区）、木材積出埠頭用地（住吉地区）の整備が行われ、大分鶴崎臨海工業地帯の造成が開始されました。その後、昭和39年の大分地区新産業都市の指定などを経て、産業基盤の整備が着実に進められ、近代的な大型工業港として発展を遂げました。

大分市の海岸線は、総延長およそ100キロ。瀬戸内海の西端、別府湾の中央に位置し、海岸線の大部分を占める大分港は、豊後水道や関門航路、瀬戸内海の海上交通の要衝にあります。古くは貿易港として栄え、現在は大型工業港へと変貌しました。



南蛮屏風（右隻）〈部分〉神戸市立博物館蔵 大友宗麟の時代には、南蛮貿易で世界とつながっていた。

大友氏改易後は貿易も衰微したままでしたが、時代の要求により、明治末期から大正初期にかけて近代港湾としての整備が始まり、こ

交通網の整備も進み、東九州の物流、情報交流の拠点として大型流通業務団地の整備、九州横断自動車道や東九州自動車道の整備など背後地へのアクセスが飛躍的に向上しています。

近代的な大型工業港である一方、市民が海にふれあえる西大分地区では、西大分ウォーターフロントを核として、背後の丘陵地や大分市から別府市にかけての海岸に位置する観光施設と連携し、魅力的なにぎわい空間を創造する取り組みも行われています。

また、豊かな漁場である別府湾や豊後水道に面していることから、全国ブランドの関あじ・関さばをはじめ、ブリやイサキ、サザエなどといった魚介類が水揚げされ、全国各地に出荷されています。大分市の海岸線は産業や観光、食といったさまざまな面で私たちの生活と密接に関わっているのです。



高崎山自然動物園やうみたまご、田ノ浦ビーチなど、海岸沿いには観光スポットが集まっている。